

カイセリにおける商業空間の変貌：史料としての映像資料

清水, 宏祐
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門：教授：イラン史

<https://doi.org/10.15017/3599>

出版情報：史淵. 144, pp.109-141, 2007-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

カイセリにおける商業空間の変貌 史料としての映像資料

清水 宏 祐

はじめに

筆者が現地調査での映像資料の重要性を認識したのは、1988-91年、海外学術調査「イスラム都市における街区の実態と民衆運動についての比較研究」(研究代表者・清水宏祐)の時点からである。このときには、西はモロッコから東は中国・新疆省にいたる、アフロユーラシアをほぼ同一緯度上にならぶ都市を訪ね、その街区と人々の生活を調査した。

第一年次に小松久男氏が撮影したトルコ共和国・トカト市の連続映像は、同市が中心部の旧市街から周辺部にいくにつれて、次第に新しい建物が増えていくありさまをよく記録していた。これに力を得て、二年次の新疆省調査では、小松、梅村坦両氏がビデオカメラを持参、調査に現地参加された堀直氏も自身の機材で撮影し、3台のカメラによる映像記録を得た。

このとき、筆者は、撮影済みの記録のデジタル静止画処理(当時はDATに変換して、連続した静止画とし、ID番号を付与した)を行い、若干の分析を担当した⁽¹⁾。(その対象は、上記の「トカト市・中央通りの商店構成」のほかに、「モロッコ王国における都市間(マラケシュ・フェス)の移動における景観の変化」「ホタンのバザールにおける家畜取引の例」「ホタンのバザールにおける商品、職種」「カシュガルの街区(コチャ)調査記録」にわたった。この作業を通じて得た知見と、その後の考察によって得た映像資料の特色と活用例を列挙してみると、以下ようになる。

映像記録のもつ特徴は：

- 時間とともに変化するものを記録できる。

たとえば、人の行動、歩き方、商取引のやり方、農作業、各種手工業の実際の手順など。あるいは、ズィクル、ザッフア、メウレウィー教団の旋舞のような、動きをともなう宗教儀礼の実態など。「ホタンのバザールにおける家畜取引」で、イスラム世界に共通するバイアの儀礼を動作として確認したのは、この一例にあたる。

- 連続した景観を切れ目なく記録できる

上述のトカト市の例のように、車から通りに沿った建物、風景を連続して撮影すれば、その解析によって、どのあたりにどのような建築物、商店、家が分布するかがわかり、市街地の構成、変化の様子を知ることが出来る。

都市と都市の間を移動中に、風景を連続撮影することにより、途中の景観・環境の変化を連続して知ることが出来る。上記の「モロッコ王国……」は、その一例である。筆者は都市の市壁に注目しているが、壁の内外で、市街がどのように変わるか、植物などの環境がどう変化するかについても映像は貴重な記録となる。

- 複雑な構造物の記録

モスク、マドラサ(トルコではメドレセ)、ハン、キャラバンサライ、ベデステン、カパル・チャルシュ、ザーウィヤ(ザウィエ、ザーウィエ)、ビーマーレスターン、シファー・ハーネなどの公共建築物は、構造が複雑で、なおかつ規模も大きく、スチルカメラでは、その全容を記録することが容易ではない。ビデオカメラであれば、説明の音声を加えながら、各部分が、どのようにつながっているかをあわせて記録することも出来る。

- 3次元空間を記録して2次元化する

一方、都市の内部における週市、年市のようなバザールで、どの通りにどの

ような店が開かれるかを知るには、カメラですべての店を流し撮りし、それをもとに店の地図を作ることが出来る。「ホタンのバザール……」は、その例といえる。筆者は、トルコのイズニク市を対象に、約15年の間「定点観測」調査を実施したが、その中には、同市における週市、年市での店の構成についての映像記録も含まれている⁽²⁾。

映像そのものは、ディスプレイやモニタ、スクリーン上に平面的に再現されるが、動きをともなうため、対象の3次元的な姿の理解に役立つ。商店の店先に吊るされた商品、定期市で常設店舗の前の路上に、同じ店が臨時に広げた露天との関係もよく理解できる。買い物をする人々の姿、動きも立体的に把握できる。

○ 音声を同時に記録できるので、聞き取りの際の状況説明、話し手の身振り、表情までも記録が可能である。また、商取引における値段の交渉の口上、売り子の呼び声、モスクからのアザーン(エザーン)、茶店のおしゃべりを通じての情報交換の様子も、さりげなく収録することができる。

映像記録の特色に着目した筆者は、その後1991-92年にかけてエジプト・トルコに滞在し、この間、ビデオ映像の収録に努めた。その結果、約90本180時間分の映像を撮影することが出来た。

これらは、当時の8ミリビデオテープにて収録したものであったが、年月とともに劣化が進み、一部ではテープ切れのために再生が不可能なものもあらわれた。

1998年から99年にかけてトルコに滞在中には、当時の最新デバイスであるDV(デジタルビデオ)にて映像を増補し、すでに訪れたことのある都市を再訪して、映像の収録に努めた。DVは、無劣化のデジタルコピーをとることができるため、保存性に優れているが、DVDやD-VHSというデジタル記録メディアとはフォーマットが異なり、アナログ変換を経て再エンコードするというデメリットもあった。しかし、同じ都市を8-9年後に再訪した結果、多くの

ところで、都市景観、都市構造の劇的な変化を観察し、これらを鮮明な画質で記録・確認することが出来た。このような撮影経緯を振り返ると、撮影済みのビデオ映像が年とともに貴重な歴史記録となっていく様子がわかる。

特にトルコ共和国では、1980年代後半から遺跡の改修が、政府の地域振興政策として積極的に行われるようになった。その結果、荒廃していた市壁が真新しい石材で補修され、場合によっては、一見何も残っていなかったところに、あらたに壁が築かれる例も多々あった。ムーシュ県の古都アフラートの市壁が、畑の中に再建されたのは、その一例である。

マドラサは、特に補修、改修がなされた建築物である。多くは博物館として使われるようになったが、1990年代には、残ったマドラサを改修、改築して、それぞれの部屋には文房具、書籍などの店舗を、中庭には茶店を開かせるところも現れた（スイワス、カイセリ、カスタモヌ市の例）。

この動きはさらに進み、街道沿いに荒廃した状態で残っていたキャラバンサライも、新しい材料で外壁が築きなおされ、観光資源として活用されるところすら出現した。また、都市の内部にあるキャラバンサライが、改修されホテルになってしまったところもある（ディヤルバク市の例）。

撮影した建築物、遺跡そのものが、なくなる危険が生じているところもある。東部アナトリア、マルディン近傍に残る古代橋とモスクで知られるハサンケイフ（ヒスン・カイファ）は、チグリス上流域に建設されたダムによって、水没の危機が目前に迫っている。1991年冬に、この橋、キュンベト、モスク、ミナレット等を撮影した映像は、まもなく、かけがえのない資料映像と化そうとしている。

過去の映像資料の重要性に着目して、筆者は、まず HDD+DVD レコーダのハードディスクにアナログテープの内容を収納することから作業を開始した。2003年のことである。当時の HDD の容量は最大でも 160GB であり、SP モードにて映像データ・アーカイブを構築することにした。

2005年度からは、科学研究費の補助を得、DV テープによる映像情報も増補して、総計約220アイテムにのぼる映像データを同一 HDD (300GB) に収録す

ることが出来た。

さらに2006年度には海外調査を行い、収録済みの景観、建築物にどのような変化があったか、人の数や姿、行動にもどのような変化があったかを観察、記録し、最新情報を得ることが出来た。今回は、ハイビジョンカメラを導入し、さらに映像の情報量をあげる試みも行っている。

2005年度までにデジタル化し、タイトルをつけて整理、HDDに収納したもののすべてを本稿で紹介するスペースの余裕はない。そのうち208プログラムを「イスラム文明史学研究室」のホームページ(http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/his_isla/)にある「科学研究費による調査研究」の項目にて紹介しているので、ご参照いただきたい。

映像記録の多くは、アナログ(Hi8)からのM-Peg変換(SPモード)である。DVカメラによるデジタル映像は、i.LINKによる転送ではあるが、デジタルコピーではなく、記録モードの違いにより、D/A、A/D変換の再エンコード・プロセスを経ている。それでも、アナログ記録よりは画質が良好で、対象の細部もよく再現されている。DVで収録した都市には、イスタンブル、アンカラ、カスタムヌ、アマスヤ、トカト、サフランボル、イズニク、エスキシェヒル、スイワァス、カイセリ、コンヤがある。

2006年にハイビジョンカメラで撮影した都市は、イスタンブル、カイセリ、コンヤ、アフヨン・カラヒッサール、スルタン・ダア(カサバ)、チャイ(カサバ)、アンカラ、アクサライである。

06年のハイビジョン映像資料(1080i)は、i.LINKを経てHDDに、同等の画質で収納した。しかし、フォーマットも異なり、従来のビデオ(NTSC・480i)プログラム一覧にはなじまないため、本稿では仮のテープ単位(1時間)の番号で示すこととする。近く、NTSCにダウンコンバートしたものを作り、従来のHDDに書き込み、一括して示す予定もある(この場合は、ハイビジョン画質とはならない)。

1. カイセリ市における商業空間の分析・カレ・チャルシュス (内城のバザール) の例

以下本稿では、映像資料がいかなる役割を果たすかについて、トルコ共和国・中央アナトリアの都市、カイセリ市を例にとって、実例をみてみたい。

まず、カイセリの歴史について、簡単に紹介しておこう。

カイセリは、トルコ語表記では Kayseri といい、カイセリ県（イル）の中心都市でもある。海拔1054メートルの高原に立地し、アンカラからマラトヤへの幹線道路と、コンヤからスィワスに抜ける主要街道の交点に位置する。

町は、すでに紀元前3000年紀に存在し、ヒッタイトとアッシリアの交易路に位置していた。

カイセリの名は、カエサルに由来し、ローマ帝国のカップドキア州の州都であった。イスラム期には、9世紀前半に、一時ウマイヤ朝に占領された。ダーネシュマンド朝のマリク・ムハンマドによる征服と市街の再建を経て、568/1168年には、ルーム・セルジューク朝のクルジュ（クルチュ）・アルスラーンのもとで、同朝の重要な中心地にもなった。イスラム史料には、Qaysarīya の名で登場する。

642/1243年にはモンゴル軍の攻撃によって、住民が殺され、市街も略奪を受けたが、アミール・エルトナーの後継者たちの治下に復興し、その様子は、イブン・バトゥータの『大旅行記』にも記載されている⁽³⁾。

その後は、カラマン侯国とズー・アルカーディル朝の抗争の舞台となり、町の支配権者も、めまぐるしく交代し、15世紀末にいたって、ようやくオスマン朝の支配が確定した。

この町の景観上の特色をなすものに、市壁の存在がある。現在では、町の北・東がわのみに残るだけであるが、灰色、黒色の石を積み上げた堅固なもので、一部では二重になっている。随所に角型あるいは円筒状の張り出しを備えていたが、現存するものは、一部である。

また、内城（イチュ・カレ）が東北部角にあり、内部はチャルシュ（バザー

ル)となっている。本稿では、まずこのバザール、カレ・チャルシュスの変化を、映像資料によって考察する。

内城内部・カレ・チャルシュス（内城バザール）の状況

市壁の一部が小さな城塞をなしている。これをイチュ・カレ（内城）と呼ぶ。東南部が鋭角になった、全体としては刃物のような形状になっている。

この内部は、1991年秋、1998年春、2006年秋の3回にわたって筆者が撮影している。

映像デバイスは、それぞれ Hi8、DV、ハイビジョンと変わり、この間の撮影側での技術的な変化が読み取れる。それ以上に変化が激しいのが、このイチュ・カレ内部の状況である。

はじめに、91年撮影の映像を、時間を追って紹介する。

映像プログラム番号152 「市壁改修部分」(カイセリ)

- 0:00.30 カレ・チャルシュス正面入り口前の道路
- 0:00.50 入り口上部の看板「カレ・チャルシュスナ・ホシュ・ゲルディニズ」
(内城バザールによろこそ)
- 0:01.02 入り口左右の壁面が改修されている。特に向かって左側は、崩壊して、残っていなかった部分を新しい石材で「新築」している
- 0:01.09 二重になっている壁の市内側が、下部から上部の矢狭間まで新規に作られていることがわかる
- 0:01.16 さらにその左手・カバル・チャルシュ方向の壁面も、新たに作られている
- 0:01.50 入り口から右手、東側の壁面。手前の低い外壁も大半が新設である
- 0:02.11 内城のシンボルである「獅子の像」入り口右側のもの
- 0:02.33 同・左側のもの
- 0:02.46 入り口を入れて南の壁の内側を西へ向かう。入り口脇には、革の財布などの小物を広げて売っている露天商がいる
- 0:02.52 その先には、西の壁との角まで、通路両側ともに店は全くみられな

カイセリにおける商業空間の変貌

い

- 0:03.09 西の壁は、すべて新しい石材で建築されたもの
- 0:03.19 アーチ上部の銘文（キターベ）
- 0:03.38 西側の壁に作られた石の階段
- 0:03.45 その右手の出口を出て壁を外からみる
- 0:04.10 この出口内側上部にあるキターベ・2
- 0:04.48 先ほどの階段（手すりなし）をのぼって、市内側の壁の上に出る
- 0:05.00 カレ・チャルシュスの西側部分をみる。手前にチャルシュ内側の平屋根・石造りの建物。奥にファーティフ・ジャーミー。その向こうにチャルシュの北側の壁にあたる市壁、さらにその先（西北方向）にクルシュンル・ジャーミーがみえる。店舗は、一切みられない
- 0:05.18 カレ・チャルシュス中央部の広場。西に石造りの建物。東にも小規模な建物が、市壁の手前に作られている。オープンスペースには、露店、仮設店舗は、一切ない
- 0:05.39 市壁内部を東側の鋭角部分までみるが、途中でも店舗は、一切みられない
- 内城の内側には石造の建物が続くが、これがチャルシュであって、それと市の間通路両側には、店舗は確認できない。
- 0:05.45 東の鋭角から南の角まで。手前、市内側の壁に接して張り出すように石の建物があり、その前を横切って、男たちの長蛇の列が伸びている。「年金の支払いを待っている」とのことであった。
- 0:06.40 東の鋭角部分にある出口を市内側の壁の上からみる。周囲に店はみえない
- 0:07.15 内城と東へ伸びる市壁の間は切れていて、道路となっている。さらに東へ続く市壁の上部は崩れているが、98年には、ここも改修されていた。
- 市壁への階段には、子供の落下事故があったそうで、「18歳以下の者がのぼることを禁ず」との告示が掲げられていたが、柵は開かれて

カイセリにおける商業空間の変貌

おり、上部にあがって、内城、イチカレの内部を観察することができた。しかし、98年には、この柵は閉ざされた06年の調査でも、のぼることが禁止されていて、柵は、長く閉ざされたままの状態、そのまえに常設店舗が作られていた。91年の、上からみたカレ・チャルシユスの内部映像は、貴重な歴史史料となったわけである
カレ・チャルシユスと入り口にある、チャルシユとは、もっぱら内部の石造りの建物内で営業する商店を示していたわけであろう

98年5月30日の同一地点での撮影

映像プログラム番号192 「カイセリ市壁98」

- 0:00.05 カレ・チャルシユス入り口（市内側）
- 0:00.12 カレ・チャルシユス向かって左側の壁
- 0:00.28 カレ・チャルシユス入り口右上部の獅子の像
- 0:00.35 カレ・チャルシユス入り口左上部の獅子の像
- 0:00.40 カレ・チャルシユス入り口から入る
- 0:00.49 内部の衣料品店（日除けをかけた仮設店舗）と歩いている人々の姿
- 0:01.10 入り口から出て行く人
- 0:01.14 入り口上部の銘文を内部よりみる
- 0:01.20 同じく日除けをかけたジーンズの店（背面は壁）
- 0:01.27 店の上部の壁面にはアーチ構造が観察される
- 0:01.35 ふたたびカレ・チャルシユス内部の様子・右側に市壁
- 0:01.41 出口
- 0:01.51 上部に別の銘文のある出口・市内方向に抜ける
- 0:02.02 その外側 市壁内部
- 0:02.12 市壁に沿った日除けのある仮設店舗・干した果物を売る
- 0:02.24 茶店
- 0:02.32 その右手奥にカレ・ジャーミーとサビール
- 0:02.42 さらに広いサビールにて足を洗う男たち

カイセリにおける商業空間の変貌

- 0:03.05 ジャーミー右手前にある花屋と奥に市壁がみえる
- 0:03.25 右へ視点をかえると閉店中の店が多い 奥に市壁がみえる
- 0:03.36 右奥に市内への出口 そこから左へ仮設の衣料品店が続く
- 0:03.47 カレ・チャルシユス中央部にある店舗（ギュネシュ）と右奥に通じる市壁沿いの道と仮設店舗の列。石造りの構造がみえないほど、常設店舗が、その前面に沿って続いている
- 0:04.01 市内側へ抜ける出口方向にいたる道の曲がり角にも衣料品店がある
- 0:04.10 市壁に登る階段 市壁沿いの衣料品の店 手前の看板には「カイセリ・チュトチオウル」とある
- 0:04.30 衣類・果実・乾物の店が混在する
- 0:04.00 左に小アーチ・右に市壁・内城のもっとも狭くなっている部分
- 0:05.45 ジャーミーの裏手に登る階段・手前にビニール製の水差しを売る店
- 0:06.09 市壁側に向かって正面と左に壁を見る・右手にはデネルケバブの店
- 0:06.22 正面奥にジャーミーのドームとミナレット・右に市壁とアーチ・壁面には赤い日除けを備えた店舗が並ぶ
- 0:06.30 カレ・チャルシユスにある絨毯屋の内部・上部は石のアーチ・両側面は改修
- 0:08.03 正面にハートゥーニーイエのキュリエ・手前に地下歩道の入り口
- 0:08.16 カレ・チャルシユス外壁側にある入り口を市壁外側からみる
- 0:08.23 年金支払いを待つ人々の行列
- 0:08.32 ハートゥーニーイエ・メドレセスイを市壁側からみる
- 0:08.42 市壁東南方向
- 0:08.50 市壁にみる花のモチーフの銘板
- 0:09.01 市壁の張り出し（ブルジュ）と手前の低い壁の二重構造
- 0:09.05 市内に戻る
- 0:09.18 再びカレ・チャルシユス入り口正面

カイセリにおける商業空間の変貌

2006年9月29日の撮影では

「カイセリ1」（プログラム化しておらず、HD・DVテープ毎の仮タイトル）

- 0:56.10 カレ・チャルシュス入り口正面
- 0:56.16 内部より入り口上部アーチの内面をみる
- 0:56.27 入り口を入れて右側より、衣料品の店舗の列続く
- 0:56.33 アーチ下部より商品（下着）が吊り下げられている
- 0:56.42 右手には工具の店
- 0:56.46 右手方向に衣料品の店、屋根は金属の支柱にプラスチックの波板を張った常設店舗へと変化
- 0:56.57 壁面に沿った店舗、反対の石のチャルシュ側の空間にも同様の常設店舗が作られている
- 0:57.17 さらに右手に進むと、「ユルドゥルム・ウジュズルク・パザル（安売りバザール）」の看板のある常設店舗（衣料品）
- 0:57.36 左壁面中ほどより常設店舗の列が続く。右側にも常設店
- 0:57.48 アーチ上部の銘板・その上部には黒色の石が嵌められている
- 0:58.48 その口から外部へ出て、市壁の外側面をみる。上部にアーチ3連
- 0:59.33 ふたたび内部の通路を東へ。壁と、中央部の石の建物の両側に常設店舗の列
- 0:59.51 市壁に登る階段。その前面にはビニールの屋根をかけた仮設店舗（靴）。向側は、波板の屋根を張った常設のスポーツ用品店
- 1:00.46 左に分岐路。その奥には石のアーチがみえ、両側は常設店（衣類）
- 1:00.52 さらにアーチ方向へと進むと、床は新しく作られ、現代の建築物の内部空間のよう。両側は、通常のアーケードと同じように商品（衣類）が通路に展示されている
- 1:01.01 内城東南部の角。向かって左（北）が常設店、右（南）が仮設店舗（どちらも衣類を扱う）
- 1:01.50 中央奥にファーティフ・ジャーミー、右に衣類の常設店。左に常設のケバブ屋（ビュレント・ウスタ・ケバブ・サロヌ）

「カイセリ 2」(同・テープ・仮番号)

- 0:00.14 東北端の、市壁外部に通じる、二重になっている出口(の内側の口)
左側に冷蔵庫を備えた食料品店
- 0:00.42 このアーチからも衣類を吊り下げている
- 0:00.52 この角は、改修されず、旧来の黒石の面を残している
- 0:00.57 その下にある常設店舗(ベルト屋)、この店のため、奥の石の建物は
みえない
- 0:01.19 二重の口の外側の部分、内側右手(南)には文具店
- 0:01.25 市壁の外部から入ってくる人々
- 0:01.32 セイト・ブルハネッティン大通りのアラジャ・キュンベト(廟)
をこの口から遠望する
- 0:01.42 市壁の外側から、この口をみる。通路は、現代の石材で舗装された
- 0:01.48 同所よりタラス大通りをはさんで、向かいのハートゥーニーイエ・
キュリエスイ(モスク、マドラサ、ハンマーム、トゥルベを併設し
た複合施設で、カイセリの代表的建築物となっている)をみる
- 0:02.21 市壁の外部にはさらに常設店舗が続いている。
- 0:02.44 同じ口から、カレ・チャルシュスに戻る
- 0:03.02 ファーティフ・ジャーミーを中央にみながら、左方向へ戻る
市内側の壁に沿って、仮設店舗(衣類、バッグ)、中央部・石の建物
側には常設店舗が続く。建物は、直接は見えなくなっている
- 0:03.56 左右(壁・中央の石の建物側)ともに屋根を持つ常設店舗(衣類)
- 0:04.20 市内側の壁に沿って常設店舗。中央側にも常設店舗が続く。大半が
衣料品店
- 0:05.27 ファーティフ・ジャーミーの裏側。
- 0:05.45 通路の角になっている部分。左にファーティフ・ジャーミーをみる。
ジャーミー側の角に常設の衣料品店。市壁側には仮設店舗。
- 0:06.02 ナマーズのためにモスクへ入る人の列
- 0:06.14 右(東)へ下着、靴の常設店舗

- 0:06.29 内城の三角形にとがった東北端をファーティフ・ジャーミー側からみる。ここでも市壁よりには日除けのある仮設店舗、中央・建物側には常設店舗（ともに衣料品）が並ぶ。建物はみえない
- 0:06.55 ブルジュ（塔状の張り出し）を備えた市壁側の口から出て、外部をみる。黒くすすけた石積みの保存状態がよく、補修された箇所は少ない
- 0:07.22 その内側部分。ここでは市壁に沿って、常設店舗（衣類）がみられる
- 0:07.29 最初に入ったカレ・チャルシュ入り口を出て、これを外側からみる
- 0:07.41 右上部の獅子の像、前回撮影時より、さらに黒く汚れている
- 0:07.47 左上部の獅子の像も同様。その下には、靴を売る露店がでている
- 0:07.56 入り口前方の道路は、さらに交通量が増加している
- 0:08.11 同地点より東方へ壁を（カレ・チャルシュスの）外部からみる

以上、3回にわたって記録された映像は、それぞれ内城の内側の景観を連続的に記録し、ここに開かれている市場の様子を、通行人、内部のモスクに通う人々の姿とともにとらえている。店舗の構成、構造を市壁、市内側の壁、入り口、通路との関係で記録していて、市場の構造、内城の構造がよくわかる。

露店は、敷石の上に布を広げ、その上で商品を売っているものであり、数は少ない。

仮設店舗は、ビニールの日よけをかけて、その下で台の上に商品を並べている店である。衣類などは、日よけを張るパイプからも吊るしている。台は、ビニール椅子を裏返した簡易なもの、専用の台、屋台のようなものなどがある。中には、ガラスの入ったショーケースや冷蔵庫を備えたものもある。

常設店舗には、いくつかのタイプがある。簡単なものは、金属のL字型の支えの上に板を渡して屋根としたもので、その下で、仮設店舗のような簡単な台を置いている。これに、縦の商品の陳列棚を設置し、そこから衣類を多数吊り下げたもの、土台を据えて支柱の基部とし、しっかりとした台を置いて商品を

並べているもの、屋根にも雨どいをつけたものもある。

中央部にある石の建物は、その側面はすべて仮設・常設店舗で覆われ、一見すると存在に気付かないほどである。内部の商店の数は多くないが、通路に入ってみると、近代的な装備が施され、照明も明るく、通常の新しい商店街（パサージュ）と区別がつかない。これは、カレ・チャルシユスでは、例外的なもので、ほかの店舗との違いが際立っている。

さらに、91、98、06年の映像記録を比較すると、次のようなことがわかる。

91年には、内城の内部にわずかに露店はみられたものの、市内側の壁、市壁と中央の石造りの建物との間の空間には、どちらの側にも店らしいものは記録されていない。店は、中央部の建物の中に限られている。

98年には、壁に添って、日除けを張った仮設店舗の列ができ、市場としての体裁が整ってきた。壁から離れた中央部にも、店舗があり、その中には屋根をかけ、常設店になったもの（ケバブ屋等）もある。

06年では、金属の支柱に波板の屋根をかけた常設店舗が、圧倒的に多くなっている。市壁に沿ったところでは日除けを張っただけの仮設店舗も見られるが、通路反対側の空間には、常設店舗が並ぶ。内城の内部が常設の市場としての体裁を整えている過程が、映像をとおしてよくわかる。

このように、本来、市の構造と構成を連続的に記録するために撮影された資料映像が時間とともに、歴史史料としての役割を持つようになり、それらをつきあわせることによって、この間の対象の変化を比較する材料となる様子がみとれるのである。

2. カイセリにおける商用公共建築物の変化と映像資料

次に、カイセリの市内に残る建築物のうち、ハンについてみてみよう。

ハン（ハーン）とは、キャラバンサライの規模を小さくしたような構造をもつ隊商宿で、商用・宿泊の複合施設である。中庭を囲んで四方に二階建ての石の建物が作られる。一階、二階ともにアーチを持ち、回廊の奥には小部屋が並

ぶ。本来は、一階に荷物を置き、駄獣を繋ぐ。二階は、商人の宿泊施設や商取引の場として使われていた。アナトリアの各地には、セルジューク朝時代より、このようなハンが作られている。その有様をカスタモヌ、トラブゾン、ウルファ（ジャンル・ウルファと改名）、イスタンブルの映像でみることができる（映像プログラム番号・030 「カスタモヌ98」、036～038 「ウルファのハン」ほか、083 「カスタモヌ98」、126 「トラブゾン・アラジャハン」、198 「イスタンブル」ほか）。

カイセリで注目されるのは、ウェズイル・ハヌ（1727年建築）とパムク・ハン（15世紀の建築）であろう。後者は、会衆モスク（ウル・ジャーミー）の隣に、前者は、さらにそこから北部の市壁方向に進み、屋根つきバザール（カパール・チャルシュ）の向かいにある。ここでも、91年、98年と06年の3回にわたって映像を収録した。どちらのハンも、内部に入り、二階まであがって、その構造と入居している店舗、階下のスペースに収納されている物資についても記録している。

91年の記録

映像プログラム番号153 「カイセリのハン」

- 0:00.08 カパール・チャルシュ内部
- 0:00.29 カパール・チャルシュの市壁側出口付近。左の食料品店は、ガラスのショーケースもなく、照明も暗い
- 0:00.40 天井のアーチとドームには、補修の跡はない。「チャルシュムズ・テミーズ・トットアルム」の看板が古く汚れている
- 0:00.47 右にカパール・チャルシュの出口、左にウェズイル・ハヌの入り口。スイカを積んだ荷車を押す男
- 0:00.57 ウェズイル・ハヌの入り口。左手にブリキの煙突の材料、左手に羊毛の袋が積んである。籠と荷車も置いてある
- 0:01.04 入り口アーチ上部の銘文（現代）とその左右に花の文様を掘り込んだ石（創立当初のもの）

カイセリにおける商業空間の変貌

- 0:01.19 その上部には、左手に1、右手に2つのアーチ状の窓。この壁面は改修がなされていない
- 0:01.28 入り口を通して外郭奥の、本体に通じるアーチがみえる。説明役のM氏の姿
- 0:01.34 外郭正面の回廊1・2階のアーチ部分3連がみえる。2階のアーチ・手すりには絨毯がかけてある
- 0:02.26 同・右側張り出し部分。ここにも、2階の手すりに絨毯をかけている。天井の漆喰に黒いしみがある。石材も、すべて古い状態
- 0:02.49 荷物を搬入する荷車
- 0:02.52 中庭右手回廊に面して置いてある羊皮(98年には、これをなめす作業をみることができた)
- 0:03.00 別の羊皮を広げて取引する人
- 0:03.26 ウェズイル・ハヌの本体中心部。中庭をはさんで、正面に、1・2階ともに5連アーチを持つ回廊。2階の3つのアーチには、絨毯が鉄の補強材にかけられている
- 0:03.33 入り口向かって右の回廊(アーチ5連)の一番手前・2階にも絨毯がかけられている。その階下には、綿花の袋が置かれ、羊毛が吊り下げられている。入り口側の1階アーチにも、3箇所羊毛の束が吊り下げられている
- 0:03.43 同所の奥、壁の漆喰は汚れていて、補修されていない。廊下部分には、綿花の袋が置かれている
- 0:04.01 中庭から、外郭方向に、二重の出入り口をみる
- 0:04.21 中庭中央部のチェシユメと、足を洗う人。キュンベト状に石の屋根をつけた古いもの。98年には、新しい白大理石製のものに取り替えられていた。
- 0:05.08 正面回廊1階支柱に吊るされた、大量の羊毛。キャンバス製の入れものに詰められた羊毛も置かれている。反対側の口の脇に置かれた大量の綿花の袋と羊毛。上にはトタンの波板で屋根が付けられている

る。羊毛も吊るされている。

- 0:05.57 羊毛が詰まった部屋と、それをみる人々
- 0:06.11 入り口側の回廊、アーチ奥の部屋の入り口と、その周囲に吊るされた大量の羊毛、床に積まれた大量の綿花の袋。奥の壁面は、漆喰が剥落した箇所が多い
- 0:06.33 階段脇に積まれた大量の綿花
- 0:06.37 入り口側回廊の支柱に取り付けられたヘザーネ（保管庫）の鋼鉄製の扉
- 0:07.05 外郭を経て出口へ
- 0:07.10 ここでも、アーチ支柱基部には、大量の綿花の袋が置かれ、柱には羊毛が掛けられている。
- 0:07.47 同じく外郭反対側のアーチ支柱にも羊毛が掛けられている
- 0:08.04 カパル・チャルシュへ抜ける途中。この通路にも羊毛と綿花の袋が置かれている
- 0:08.39 その奥の通路の脇には、天井まで積み上げられた、大量の羊毛の袋
- 0:09.08 カパル・チャルシュに入って、すぐ右にベデステン(1497年建設)
- 0:09.35 ベデステン中央部の支柱。周囲の店は、みな絨毯屋
- 0:09.47 中央部の大ドームは、黒くすすけていて、改修の跡はない
- 0:10.01 カパル・チャルシュの入り口、通路をはさんで靴屋がみえる
- 0:10.18 ベデステン中央の広い床に絨毯を広げている
- 0:10.22 ほかでも、随所に絨毯を積み上げている。これは、以後の映像ではみられない光景で、ベデステンが作業場になっていることを示している
- 0:10.51 工房の中で絨毯を補修する職人
- 0:11.24 パムク・ハンの入り口左側。刃物屋「アナドル・ブチャクチュス」「バシャク」の看板。帽子売りの露店が、入り口左脇にみえる。帽子をハンの外壁に掛けているのは、98年の調査時と同様。入り口右には大量の羊毛が吊るされている。綿花の袋も置かれている

カイセリにおける商業空間の変貌

- 0:11.45 道ひとつへだてた向かいに「アスマル・チェシュメ（シャイフ・ミュエイドによる1390年の建設）」があり、手足を洗う人々の姿をみる
- 0:12.23 上部の銘文
- 0:12.35 パムク・ハン入り口上部の看板（「パムク・ハヌ」・15世紀とある）
- 0:13.24 98年には火災にあっていた、入り口側2階の2区画（4つの窓をもつ）は、このときには、健在であった

98年の映像

映像プログラム番号193 「カイセリ市内98・ハン」

- 0:01.22 カパル・チャルシュ通路を市壁方向にみる。左右に衣料品店
- 0:01.45 ウェズィル・ハヌ入り口上部のアーチ
- 0:01.52 入り口から内部をみる。羊毛がむき出しのまま積み上げられている
- 0:02.11 その手前反対側をベデステンに入る
- 0:02.24 ベデステン中央・上部のドームと明り取りの窓。上面はすすけていて、改修の跡はない
- 0:02.49 ベデステンからカパル・チャルシュへの入り口をみる
- 0:03.04 「ベデステン・イチ・ハルシュラル・チャルシュス」の看板
- 0:03.25 ベデステンを出た左手にあるチェシュメ
- 0:04.05 パムク・ハンの入り口。「カパン・ハヌ」と「パムク・ハン」の名が併記された看板（2006年撮影時には撤去されていた）
- 0:04.14 入り口向かって右側の壁面に羊毛の束がかけてある。左側には帽子売りの露店。ハンの壁に帽子をかけて、陳列している
- 0:04.29 内部より入り口をみる。アーチの下には、左右に綿花の袋が並べられている
- 0:04.39 入って右側の支柱に「ユンジュ・ムスタファ・ハムルキヤール・オウル」の看板
- 0:04.44 2階に上がって、中央部左側のアーチと回廊をみる。改修は、まったく行われていない。荷物は、置かれていない。

カイセリにおける商業空間の変貌

- 0:05.03 2階回廊・中庭側のアーチ、各室入り口の小アーチ。ともに黒くすすけている
- 0:05.25 入り口より正面上部のアーチ2連、右側2階の四角い窓二つをみる。ストーブの煙突が中庭に設置されている
- 0:05.36 入り口の内側には、トタンの屋根をかけた事務所・物干し場があり、羊毛の束がかけられている
- 0:05.53 パムク・ハンの外観を左手方向からみる。帽子売りの屋台の左は、エイワーンにガラスと扉をはめた事務所
- 0:06.07 その左手は、刃物の常設店が1階に入居。2階部分は、「4年前に火災で内部が焼失した」とのことで、その後の補修もされていない。石の構造材の突出部分も、すすけたまま
- 0:06.07 ウェズィル・ハヌの入り口と、回廊部分
- 0:06.23 入り口から右側・奥にむかって4つのアーチ。奥の柱には羊毛が吊り下げられている
- 0:06.45 正面に、1階2階ともに5つのアーチを備えた回廊。全体に黒くすすけている。絨毯は、かけられていない
- 0:06.50 入り口・左側の回廊。1・2階ともに4つのアーチ。上部回廊の1箇所絨毯がかけてある。中庭には、新しく作られた白い大理石のチェシュメ
- 0:07.14 入って右側の2階回廊・4つのアーチの手すりには、絨毯がかけてある
- 0:07.17 入り口アーチ下部から階段にかけて、綿花、羊毛の袋が積まれている
- 0:07.33~0:08.40 中庭に面した台上での、短刀を使っての羊の皮なめし作業
- 0:08.55 中庭には、多数の商用車が停められている。06年には、普通車が奥に駐車していた
- 0:09.06 左手・2階回廊にある靴直しの工房
- 0:09.32 入り口に通じる外郭・回廊アーチ部分にかけられた、多量の羊毛

カイセリにおける商業空間の変貌

2006年9月29日

「カイセリ1」

- 0:02.59 パムク・ハン東面・北面の外壁
- 0:03.07 パムク・ハンの入り口・アーチ下部に「ハムルカル・オウル」の看板
入り口右手に綿花・合成綿（ポリエステル）の袋が積んである
- 0:03.07 入り口アーチ内部・左右に合成綿の袋
- 0:03.48 再び外部壁面・入り口右側上部に綿花の束が装飾としてかけてある
- 0:04.08 内部奥・西側壁面の最北部分・アーチ状の入り口は波板で塞いである
- 0:04.27 左奥隅・上部、それぞれ左右に二つのアーチをみる
- 0:04.39 1階奥・一番左側には綿花、合成綿の袋、荷車、天秤ばかりが置かれている
- 0:04.43 同2階部分には2つのアーチ。左側のアーチ奥には、荷物が防水シートに包まれて置かれている
- 0:05.04 入り口左側の2階アーチ上部は半分ふさがれ、その前にストーブの煙突がみえる
- 0:05.24 中庭より入り口をみる。向かいにチェシュメの上部がわずかにみえるが、下部は、前方につくられた刃物店によって隠されてしまった
- 0:05.29 ベデステン（ベダステン）の入り口、「ベダステン・イチ・ハルジュラル・チャルシュス」の看板
- 0:06.10 ベデステン内部の絨毯屋・それぞれエイワーン状の個室に入っている
- 0:06.34 完全に残っている中央部の大ドーム
- 0:07.02 パムク・ハン側のベデステン入り口上部を内側よりみる
- 0:07.25 カパル・チャルシュに通じる口、その向かいには靴屋がみえる
- 0:07.55 絨毯屋（サバシュ氏）の内部、カイセリ近郊で織られた羊毛、絹の絨毯とキリム

カイセリにおける商業空間の変貌

- 0:08.32 ベデステンを出て、カパル・チャルシュへ。入って左側に衣料品店
- 0:09.10 ウェズイル・ハヌの入り口
- 0:09.14 ウェズイル・ハヌのカパル・チャルシュ側部分。アーチの支柱に羊毛が吊り下げられている。改修の跡はない
- 0:09.37 本体内部、入って左側2階のアーチ4つには、それぞれ下部の手すりよりキリムがかけられている
- 0:10.10 入り口右手の側面の一番手前は、ドアが付けられて、事務所となっている
- 0:10.27 正面5つのアーチ。左手の二つには、絨毯がかけられている
- 0:11.14 中庭右側には、羊毛と合成綿の袋が積み上げられている
- 0:11.42 中庭の新しいチェシュメには、変化はみられない
- 0:11.55 2階に上がる階段部分には、変化はみられない
- 0:12.52 2階の入り口側・手前角から正面の左側アーチをみる
- 0:13.08 右手に5つのアーチ構造
- 0:14.21 右手回廊奥の部屋。この壁面は、新しく漆喰が塗られ、入り口にも長方形のドアが取り付けられている
- 0:16.45 2階へ上がる階段奥のアーチ。鉄製の梁にも絨毯が掛けられている。
- 0:17.01 中庭の俯瞰。2階の大半が、絨毯屋によって占められていることがわかる
- 0:17.33 98年撮影時に入った口。入り口右側にも合成綿の袋が積み上げられている
- 0:17.58 入り口側1階、3・4番目のアーチ中央支柱に取り付けられたヘザーネの鉄製扉
- 0:18.15 2階に残る靴修理の工房
- 0:20.55 中庭に面して置かれた天秤ばかりと羊毛の束
- 0:21.40 外郭2階回廊部分。こちらにも絨毯が掛かっている
- 0:22.04 同・1階回廊。こちらは漆喰による補修がなされていない
- 0:22.50 ウェズイル・ハヌのウルジャーミ側への入り口。装飾のあるポルタ

ルを備えている

0:22.50 1723年の建設という表示（記録では1727年）の板

0:23.23 ウェズイル・ハヌの外観。正面入り口と左・ウルジャーミー側の壁面

06年には10月10日にパムク・ハンを再訪した。このときの映像で、9月29日の情報を増補する。

「アクサライ・カイセリ」（仮テープタイトル）

0:30.06 入り口左側のウルジャーミーよりの外壁。階下の刃物屋「アナドル・ブチャクチュス」は閉店して看板を撤去。2階の火災現場は、歴史的建築物であるにもかかわらず、石材の上にコンクリートで窓を塗りこめて、壁にしてしまった

0:30.17 パムク・ハンの向かい側は、広いショーウィンドウを備えた新しい商店（衣料品）が作られ、ここにあった14世紀の「アスマル・チェシメ」は、なくなってしまった

0:31.29 入り口左側外部、98年撮影の帽子売りは、露店から、壁面に棚を取り付けた半常設店へと変化。入り口には、9月29日より多くの合成綿の袋が積まれている

0:31.40 入り口のアーチ内面・上部。黒くすすけている。左の事務所より煙突が出て、アーチを横切って中庭へ抜けている

0:32.30 左手の回廊2階部分は、さらに多くの不用品が積まれている

0:32.34 9月29日撮影の正面奥の、波板で入り口を塞がれた部分の左隣のエイワーンには、外部にシャッターが取り付けられて、倉庫として使われていることがわかる

0:32.49 内部は、むきだしの綿花が積まれている。奥には、袋入りの合成綿の袋がみえる

0:35.12 98年撮影時に「4年前に火災にあった」という2階部分を回廊からみる。回廊の天井の石もひどくすすけている。室内も補修の跡はない

- 0:35.28 合成綿の袋を背負って、運び込む人
- 0:36.10 正面の回廊・上部の天井が落ちていて、空がみえる
- 0:36.37 合成綿の袋を運び込む作業が続く
- 0:36.54 3階に通じる階段を上ると小部屋があるが、ここも天井が落ちて
いる。
- 0:37.57 パムク・ハンの向かい側のベデステン入り口を抜け
- 0:40.01 カパル・チャルシュヘ入る
- 0:40.40～ イフタール(ラマザン中に夕食を開始する時間)が迫り、吊るした
衣類を次々に長い棒の先についた鉤で、取り込む人々の姿(現地時
間午後5時17分より)

パムク・ハンについてみてみよう。91年、98年、06年の調査映像では、どれも基本的には大きな変化はみられない。現在でも依然として未改修の状況であり、外部、内部の石材も黒くすすけたままである。94年に火災にあった2階東側部分も、内外ともにまったく補修されていない。1階の中庭と、奥の1室が倉庫として使われている。

聞き取りによると、近い将来、エスナーフ(商工組合)によって、パムク・ハンも改修される見込みであるという。旧来の面影を留めぬように手直しがされてしまうことが憂慮される。

06年の、2回目(10月10日)の映像では、ここへ荷物を搬入する人の様子を記録することが出来た。

ウェズィル・ハヌとは異なり、小規模な構造ゆえ、中庭までは車は入らない。人力にて担ぎ込む、中東のバザール特有の姿を、いまだにとどめている。

主として貴重品を扱う、密閉度の高いベデステンも、改修はなされず、中央部の大ドーム内壁は、黒くすすけた状態のままである。91年の調査時には、中央共有スペース部分でも絨毯を広げて作業する人の姿があった。映像を比較すると、作業場から展示・商談をする店の集合へと変わっていく姿が読み取れる。

入り口の表示が、91年の「パムク・ハヌ」から98年には「カパン・ハヌ パ

ムク・ハン」となり、06年には、それもなくなって、特定の店の商標となったのも、注目される。

火災にあったとはいえ、歴史的な建築物の上からコンクリートを塗るという補修は、今後の保存の観点からも問題があろう。

パムク・ハンとカパル・チャルシュの間にあった14世紀末に建設のチェシュメも、商店建設によって姿を消した。91、98年次に撮影した映像で、実際に手足を洗う場として使われていることが確認されただけに、残念である。

ウェズィル・ハヌでは、91年当時より、1階に入居する絨毯屋が、アーチの構造材や手すりの部分に商品をかけて展示する姿がみられた。06年の映像では、98よりも、さらに絨毯屋の占める割合が増加している。

また、倉庫として収納されている物資は、91、98年の羊毛、綿花という天然素材に対して、06年には合成綿の割合が急増している。

91年には、中庭、回廊内部、部屋の内部に羊毛、綿花が多く収納・積み上げられていて、ここでの商取引も行われていた。当時は、ハン内部への車の乗り入れは禁止で、人力による搬入のみであった。98年には、多数の商用車が中庭まで入っていたが、集積される羊毛、綿花の量は低下傾向にあった。

中庭のチェシュメは98年段階では新しい背の低いものに変わり、06年にも同じ状態で使われていた。

ハンの特徴の一つに、2階部分には、仕立屋、金属加工の職人が入居する例が多い。ウェズィル・ハヌでは、98、06年ともに同じ靴修理の工房が2軒確認された。

ウェズィル・ハヌの内部を詳細に紹介したが、ここも、「大カイセリ市当局」(カイセリ・ピュユク・シェヒル・ベレディエスイ)が、同所を改修して、市場にするという計画が、報じられている(03年、6月29日付け『ザマン』紙・中央アナトリア)版の報道による <http://arsiv.zaman.com.tr/2003/06/icanadolu/hs.htm>)。ここで撮影した映像記録が、今後かけがえのない貴重なものとなる可能性が生じたわけである。

イスタンブルでも、ラーレリ・ジャーミー裏のチュクル・チェシュメ・ハヌ

(タシュ・ハン) やマフムート・パシャ地区のキュルクチュ・ハンのように商店が多数入居している例がある一方、ヌール・オスマニエ裏のチュハジュ・ハンのように、中庭に店舗を作り、2・3階を工房として残すものもある。カイセリにおいては、まだハンの所要な役割は商品の貯蔵、保管、取引である。ハンが、商店街となってしまえば、長年続いていた本来の機能は失われてしまう。今後の動向に注目するところである。

3. 公共建築の改修現場とその後の姿

次にメドレセが改修され、商用施設(文具・書籍の店)として使われるようになった例を紹介してみよう。カイセリの旧市街北西に位置するアウグンル・メドレセシが、それである。同メドレセは、キターベが失われているので詳細は不明であるが、13世紀の建設と思われる。91年にカイセリを訪れたときには、ちょうど改修工事が行われていた。

91年

映像プログラム番号151 「カイセリのジャーミー、メドレセ、ビーマーレスターン」

0:21.58 ゲウヘル・ネスイベ・シファー・ハーネスイ正面よりメドレセを遠望する

0:22.01 メドレセの改修現場。西北の角にあるトゥルベのキュンベトは残っている。そこから南へ向けて、内部の壁を建設中

0:22.016 キュンベトと、それに付属する建築物は、一部基部が欠けているものの、よく残っている。その前に補修、建築用の新しい石材が積まれている

0:22.23 キュンベト南側の内壁(メドレセ全体の西側部分)。上部のアーチは残っているが、基部を新しい石材で補修中

0:22.55 西側外部の壁面は、新しい石材で建設が終わっている

0:22.59 キュンベト西北の基部(メドレセの西北の角にあたる)は、新たに

カイセリにおける商業空間の変貌

改修されていて、新旧の対照が痛々しい

- 0:23.04 北側正面入り口は、アーチは残っているがポルタルは崩壊している。東北過度の壁面も上部が崩れていて、内部のアーチ上部が露呈している
- 0:24.18 正面の大エイワーンの再建現場。木製のアーチの木組みが完成し、その上に石をのせるところである
- 0:24.42 石を運び上げるためのウインチ
- 0:25.01 大エイワーン向かって左の小アーチは、旧来の姿を残している
- 0:25.10 内部東側の壁面。上部に残るアーチと、下部の部屋の壁を新しく作り直したところとの違いが歴然としている
- 0:25.25 内部西側には新しく3つのアーチの支柱が、新規に作られている。入り口のアーチには、内部の漆喰が一部に残っている
- 0:27.34 入り口向かって右側の外壁。キュンベト手前の3つの小アーチは残っているが、下側を新しく作り直している

06年「カイセリ2」

- 0:02.33 マドラサの東側外壁面。明り取りの小さなスリットがある。まったく新しい石材による建築
- 0:03.00 北側の正面入り口。向かって左に茶店とコーラの売店。右に絵葉書、ナザルルク（邪視よけのお守り）を陳列。正面の入り口アーチにはガラス窓をはめている
- 0:03.24 内部は、一軒の店。文具、書籍とコーナーを分けて販売。吹き抜けの中庭の天井部分にはガラスをはっている。クウウルジュム・キュルトゥル・ヴェ・サナト・メルケズィ（クウウルジュム・文化・工芸センター）の名の大きな看板を掲げている
- 0:03.41 正面の大エイワーンには、中二階の床をはり、その上にカフェを設けている。ラマザン中ではあるが、家族客が入っている
- 0:04.26 正面を、距離をおいて外側からみる。キュンベトがポルタルの右に

みえている

0:04.38 西側のまったく新しい壁面

改修工事中の現場を撮影するのは、まれな機会である。このときの工事は、建築というのがふさわしいほどに、大胆に新しい石材を積み上げ、アーチをかけて再建が行われていた。映像では、残存している部分の収録に努め、新しい部材との対比を明らかにした。しかし、工事がおわり、文房具・書籍の店として営業を開始すると、06年の映像にみえるように、旧来の面影はほとんどなく、もはやメドレセというよりは、小型ショッピングモールを思わせる内装に変貌している。周囲は、ミーマール・スィナン公園として整備され、緑地化されて、91年の撮影時のような荒廃した雰囲気はない。

内部が同様に商業空間に変わったメドレセに、カイセリの代表的な建築の一つ、サーヒビーイエ・メドレセシがある。

91年映像プログラム番号 「カイセリのメドレセ」

0:07.45 南側の入り口を入れて右手（西）には、婦人もののバッグ・小物店が入り西側の回廊第1室までを占める

0:08.38 2室目は空き、第3室には書籍、4室は文具店となっている

0:08.47 正面の大エイワーンは、ガラスをはめられ書籍店となっている。その右の小部屋も同じ書籍店が占める

0:09.03 東側の回廊、奥（北）には文具、次も文具店。間のアーチの支柱にバッグをかけている

0:09.12 その手前（3室目）は書店、一番入り口側の小部屋は使われていない

0:09.32 中庭からみて、入り口左側（東）には文具・書籍の店。バッグを吊るし、リーフレットを置いた陳列棚を立てかけている

06年「カイセリ・ザウィエ」（仮テープタイトル）

カイセリにおける商業空間の変貌

- 0:07.54 サーヒビーイエ・メドレセシィの南側にある入り口
- 0:08.07 改修された内部。天井のない中庭をとりまく回廊。中央奥の大エイワーンにはガラスがはめられ、書店となっている。中庭に新設されたチェシュメの清掃中
- 0:08.25 入り口を入れて左隣にはインテリアショップ
- 0:08.33 左手回廊には、手前から3つの小部屋に文具店が入っている
- 0:8.51 左手回廊中央部の中エイワーンにもガラスをはめて書店が入居
- 0:09.11 入り口を入れて右隣には文具店
- 0:09.25 右手回廊には、高いアーチの中ほどの高さに波板をはり、その下に文具店、次は茶店、中央の中エイワーンにもガラスをはめて店が入っているが休業中。
- 0:09.44 チェシュメのアップ
- 0:10.03 入り口のアーチを内部よりみる。天井はすすけていて、古い状態をとどめていることがわかる

2つの映像を比べると、店の入れ替わりがあること、茶店ができて休憩の場ともなっていること、床面がきれいに整備されたこと、東側回廊のアーチには波板が張られて仮設の屋根となっていることが違いである。しかし、商業空間としての利用実態には、大きな変化はない。

4. 撮影時の状況を反映する

06年パムク・ハヌ再訪の箇所の最後で記したように、今次の調査は、ちょうどドラマザン(アラビア語のラマダーン)の最中に行われた。このため、イフタール(昼間の断食の後で、最初にとる食事)のためにいっせいに店を閉める光景をみることができた。上記のカプル・チャルシュでは、さらに

- 0:41.16 市壁側出口へと進むと右に東へ抜ける枝道。こちらも衣料品店街で閉店準備がすすむ

カイセリにおける商業空間の変貌

- 0:42.50 次の東側への枝道でも、棒を使って衣類を取り込んでいる人の姿が目立つ
- 0:43.19 南北のメイン通路と次の東西の枝道の交差する点からパムク・ハン側、ウェズイル・ハヌ側をみると、いずれも吊した衣類を棒で取り込むのに忙しい
- 0:43.40 カパル・チャルシュのウェズイル・ハヌから市壁へ抜ける通りを市壁方向にみると、左手の靴屋が箱を重ねて店に取り込んでいる。右側では、すでにシャッターが閉まっている
- 0:43.50 ウェズイル・ハヌ側を振り返ると、手前左2軒以外は、すべてシャッターがおりている
- 0:44.14 さらに出口へ進むと、およそ半分の店が閉店している
- 0:44.26 右の靴屋が閉店準備中。買い物客の姿は、まばらとなる
- 0:44.49 次の東への枝道。手前の2軒（靴屋と衣料品店）は作業中。奥は大半の店が閉店した
- 0:45.14 市壁側出口近くでは、まだ開店中の店が多い。
- 0:45.35 次の東への枝道では、まだ開いている店が多い
- 0:46.20 出口に向かって左側の食料品店（ソーセージ、チーズ、漬物）は営業中
- 0:47.11 出口脇の靴屋、衣料品店は営業中
- 0:48.25 市壁の外に出て、カパル・チャルシュの入り口をみる。「カイセリ・カパル・チャルシュ・デミルカプ・ギリシ」と書かれ看板がアーチ上部を覆い、その下にはガラス戸がはめられている。左右の市壁は、いずれも新しい石材で改修済み（現地時間午後5時29分）

という、イフタール（当時、現地時間で午後6時50分ころ）をおよそ1時間20分後に控えての人々の動き、店の様子が、刻々と記録できた。カパル・チャルシュのように大規模なバザールでは、奥の店から順次閉店準備に入り、客が外へと向かう動きにあわせて、店の閉店作業も外側へと移っていくありさまがわ

かる。出口付近の店は、最後に閉店するようになっている。

時間とともに変化する歴史の記録は、一種の理想でもあり、また研究者にとっても格好の史料となろう。映像のもつ魅力の一面を表すものといえよう。

5. カイセリにおける都市景観の変化

古都カイセリのランドマークとなってきたのは、市壁、内城と並んで、その向かいにあるフナト・ハトゥンのキュリエ（ハートゥーニーイエ・キュリエスイ）である。ルーム・セルジューク朝時代1237年にモスクが建設され、それにマドラサ、ハンマーム、廟が併設された宗教複合施設である。これが、街の中央部に位置して、都市の象徴となってきた。現在では、この横にカイセリ・ヒルトンの超巨大な建物が作られ、一種異様な雰囲気をかもしている。06年の撮影では、内城、サーヒビーイエ・メドレセスイ、シファー・ハーネ等の隣接しない施設の映像にも、遠景にこのホテルが割り込んで、違和感がすることがあった。

91年、98年撮影の映像は、都市景観の観点からも、貴重な史料となってしまう。

同様なことは、他の都市でもいつでも起こりうることであろう。映像記録の収集が急がれる所以である。

カイセリのカバル・チャルシュは、規模が大きく、構造も複雑で、トルコで第4番目に大きなものといわれている。ここでも大掛かりな改修・新設が行われ、91年の調査では、内城の向かい側に、作られたばかりの北側出口と店の北面が露出していた。

映像記録によれば；

91年

映像プログラム番号153「カイセリのハン」

カバル・チャルシュ外部の改修と整備

0:19.01～0:19.30 カバル・チャルシュの北側改修面

東側からガラスをはめた4つのエイワーン・大アーチをもつ通路・さらに西へ向かってに3つのエイワーン、西北角の2つの中アーチの通路・北側へ続く西側面に開口した4つのエイワーン・さらに大アーチの通路と4つのエイワーン・大アーチの通路・4つのエイワーンという、複雑な連続構造物が完成している。まだ、それぞれのエイワーンには店は入居していない状態である

0:19.31 これの北側は荒廃状態で、まだ建築物はない

という、4本の通路をそなえたカパル・チャルシュの構造をうかがえる新しい面が露出していた。しかし、06年には、これらはごく一部（西北角）を除いて、その前面に作られた商店によって覆われ、本体部分をみることはできなくなった。これも、景観の上での大きな変化である。

ルーム・セルジューク朝の都市として、同時代の多くの建築物をもつ古都カイセリであるが、このようにみてくると、現代史の中で翻弄され、都市景観も刻々と変化しているようである。その歴史の一こまを切り取った映像は、今後ますます、その重要性を増すものと思われる。過去の記録の集積・分析とともに、新たな映像を定期的に収録する必要がある。

註

- 1) 清水宏祐・小松久男「調査で収集した映像資料の処理について」清水宏祐編『イスラム都市における街区の実態と民衆組織に関する比較研究』東京外国語大学、1991年、159-171頁。
- 2) Kosuke SHIMIZU “A Comparative Study of Field-Video Information and Digital Processing.” *Interaction and Transformations*, Vol.2, Kyushu University, 2004, pp. 185-186.
- 3) イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳註、イブン・バットウータ『大旅行記』、平凡社・東洋文庫、1998年、第3巻、289頁。

本稿は、2005～2007年度・科学研究費（基盤研究B）「現地調査で収録した映像資料のデジタル化と情報共有ネットワークの構築」の成果の一部である。

カイセリにおける商業空間の変貌



写真1 カレ・チャルシュス・91年



写真2 カレ・チャルシュス・98年



写真3 カレ・チャルシュス・06年



写真4 パムク・ハン・91年



写真5 パムク・ハン・98年



写真6 パムク・ハン・06年

カイセリにおける商業空間の変貌



写真7 ウェズイル・ハヌ・91年



写真8 ウェズイル・ハヌ・98年



写真9 ウェズイル・ハヌ・06年



写真10 イフタールを控えて商品を取り込む人々・06年